

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 26 日現在

機関番号：17102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26820272

研究課題名(和文) 香港におけるカトリック教会堂の営繕活動とその価値評価に関する研究

研究課題名(英文) A Study to Assess Values of Building Activities by the Laity for the Catholic Church in Hong Kong

研究代表者

福島 綾子 (Fukushima, Ayako)

九州大学・芸術工学研究院・助教

研究者番号：50432878

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：信者による宗教建築の建設、維持管理という「営み」を文化財価値として位置づけることを目的とした。建設するという「営み」がいかなる意味、精神性を持つのかという既往研究がきわめて少ない。本研究が対象とした香港のカトリック教会では、聖職者や修道者ではない「信徒」、特に建設関係の専門家である信徒が、教会堂営繕のための組織をつくり、その専門性をもって奉仕している。このことの背景を、教会史、香港社会史、政教関係などの観点から考察すると同時に、信徒がこの「営み」において精神性、主体性を獲得してゆく過程を論じた。

研究成果の概要(英文)：Living religious heritage are usually maintained by believers through their contribution and commitment including voluntary provision of the believers' own professional expertise such as planning, designing, and constructing religious facilities. Heritage value can be identified not only in tangible religious architecture but also in such intangible contribution and commitment of lay believers. This study aimed to understand why and how lay Catholics of Hong Kong, particularly those of building professionals, involve themselves in such voluntary building activities. It was found that lay Catholics' involvement was necessitated since the late 1970s from social and political factors unique in Hong Kong, and also prompted by "lay spiritual movements," which arose from the renewed notion of the "laity" in the 1960s. In the 2000s, the laity enhanced the spiritual dimension of the involvement to live out their own faith. These should be assessed as spiritual value of religious heritage.

研究分野：文化財学

キーワード：カトリック 教会堂 信徒 営繕 霊性 香港

1. 研究開始当初の背景

(1) 現行の文化財行政、文化財保存制度には、建物や敷地の所有者、使用者が、それらを建設し維持管理するという「営み」そのものを価値づけ、保全の対象とする考え方がほとんどない。特に宗教建築についてはこの「営み」は重要と思われるが、学術研究においてもこのような視点での研究はほとんどない。

(2) 香港のカトリック教会では、信徒が教会堂営繕に積極的に参画している。そしてその営繕は、特に現代になって高度に組織化され、効果的に機能している。

2. 研究の目的

(1) 信徒による教会堂営繕という営みを価値づけし、その営みを適切に持続あるいは更新していくため、価値評価の枠組みを形成することを長期的に目指す。この端緒として、この価値そのものに関する歴史学的、建築史学的研究をおこなう。

(2) 営繕における信徒参画のひとつの具体例として、香港のカトリック教会を対象に研究をおこない。なぜ信徒が教会堂営繕に参画しているのか、その参画の実態はどのようなものであるのか、それは香港の近現代史のなかでどのように変遷したのか、その営みの価値はいかなるものであるのかを明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 香港教会建築類型化：信徒はどのような教会建築を建設し維持管理しているのかをまず把握するため、建築の類型化をおこなった。これは、香港教会建築に関する既往研究がほとんど存在しなかったため、必要であった。政府の建築関係機関及びカトリック香港教区で教会建築の図面を収集した。現地で教会堂を視察した。

(2) 信徒の教会堂建設参画史調査：研究の対象は、主に戦後の信徒参画であるが、それは香港がイギリス植民地となった1841年から現在に至るまでの近現代史のなかで理解され、位置づけられなければならない。この概史を描くため、カトリック香港教区アーカイブスと教区建築及び発展委員会にて、関連する資料を収集した。これらは議事録や書簡などの一次資料である。また、教会堂営繕に関わってきた司祭、信徒、職員、設計者など多数にインタビューをおこない、彼らの具体的な活動を聞き取った。信徒の活動はほとんど記録も公表もされていないため、こうしたインタビューが一次資料となった。

(3) 歴史的な文脈考察：信徒がなぜ教会堂営繕に参画をしたのかは、複合的な要因、背景で考察されるべきである。すなわち、信徒をとりまく教会の状況、政治、経済、教育、その他の社会的状況とその変遷を把握しなければ

ならない。従って、教会史、信徒神学、宗教社会学、香港社会史、政教関係史、建築史、都市史、教育史など多岐にわたる既往研究を収集し、分析した。そもそも、「信徒」とはカトリック教会でいかなる存在であったのか、教会史的な文脈で、「信徒参画」はどのように現れたのかを考察した。そして、その信徒を生んだ香港社会はどのようなものであったのか、とりわけ、教会堂営繕に参画したのは建設専門家の信徒であるが、その建設専門家にして信徒である人々は、どのようにして香港社会で誕生したのかを考察した。

4. 研究成果

(1) まず「信徒」とは教会史的に何であり、誰であり、そのあり方はどのように変遷していったのかを、既往研究の分析に基づいて明らかにした。信徒は中世から現代に至るまで、聖職者に従属し劣る存在と考えられてきた。19世紀後半の信徒に関する神学研究の深まりを受け、1960年代前半に開催された「第二バチカン公会議」において、信徒概念は一新された。すなわち、信徒は聖職者、修道者と平等、対等な存在であり、聖職者と同様に宣教、使徒職の義務と権利を持つというものである。これによって教会は「信徒使徒職」を推進したが、その理念が広く実践されるのは、世界的にも1980年代になってからであった。

(2) 香港社会のなかで、「カトリック信徒」がどのように誕生し、増加し、また、「建設専門家」がどのように育成されてきたのかを既往研究の考察に基づいて明らかにした。香港では1841年の植民地化以来、政教は協力関係にあった。すなわち、政府は教会に助成金を与え、学校や病院を建設、運営させてきた。この政教協力関係は戦後の大陸からの難民流入を受けてさらに強化された。政府助成を受けたカトリック学校が続々と建設され、そこに入学した生徒の多くが受洗し信者となった。他方、戦後の急速な都市開発は、香港人の建設専門家を多数必要とし、1950年になって香港の大学で建築教育が始まった。香港経済の成長、産業の変化にしたがって、都市も成長し、ますます多くの香港人建設専門家が養成された。そしてその中には、少なからずカトリック信徒がいたのであった。この人たちが、1970年代以降、教会堂営繕に参画していくのである。

(3) 香港のカトリック教会建築を類型化し、香港社会史との関連における変遷を描いた。すなわち、戦前は、独立した棟である宗教活動専用空間としての教会堂が建設され、西洋の様式を持つものであった(図1)。設計者は西洋人であった。戦後の人口急増を受け、政府は専用の教会堂を新築することを禁じ、教会堂は学校と一体的に建設することを求めた。このため、戦後の教会堂は原則的にすべて、学校を併設するものとなった。これらの

ほとんどすべてが、建設と運営において、政府の助成を受けた。1960年代までは、教会が指名した設計者（ほとんどの場合は信徒）がこうした学校と一体の教会堂を設計した。1960年代前半までは、教区は、学校の中に教会堂専用空間を設計し建設した。1960年代後半以降は、学校のなかにこうした専用空間の教会堂を設けず、学校講堂を週末に小教区教会堂としてミサに使用するという方式が主流になった。これは香港固有の教会堂のあり方であり、「ミサ・センター」と呼ばれた。工費削減、工期短縮、限られた空間の効率的利用のためであったと思われる。1970年代以降は、ニュータウンの開発とともに、公営団地が増加した。政府は団地に標準設計の学校校舎を建設し、教会などの慈善団体に運営させた。70年代以降、カトリック教会はこうした「団地学校」のテナントとなり学校を運営しつつ、その講堂を「ミサ・センター」としても利用した。1984年、英中共同声明が、香港が1997年に中国に返還されることを発表した。香港の市民、信者は、大陸における民主化抑圧、宗教抑圧をよく知っていた。香港教区は返還後、教会堂の新築が許されなくなったり、既存の教会堂、とりわけカトリック学校に併設される教会堂が接収されることを恐れ、返還前に対策を取ることにした。そのひとつは、返還前に、できるだけ多くの教会堂を新築することであった。そしてその教会堂は、これまでのように政府助成に依存するのではなく、接収の可能性を避けるため、



図1 専用の教会堂、聖母無原罪カテドラル 1881



図2 幼稚園併設の教会堂、聖アンドリュウ教会 2006

教区が資金をすべて自前で調達し建設しなければならなかった。しかしなお政府は何らかの公益施設を教会堂の新築に際しては併設することをもとめた。こうした課題を解決するのが、政府助成のない幼稚園を併設することであった。こうして1990年代になると、幼稚園を併設した教会堂が続々と竣工したのである（図2）。さらに積極的に建設資金を調達するため、教区は都心部の既存教会堂を民間ディベロッパーと共同で再開発し、収益を複数の教会堂建設にあてるという方法もとった。

(4) こうした香港社会の文脈の、教会建築の変遷のなかで、建設専門家である信徒がどのように営繕に参画していったのかを明らかにした。

まず、香港で信徒参画を促進した要因を指摘した。①第二バチカン公会議において信徒のあり方が一新され、教会運営を含む「信徒使徒職」が推奨された。この公会議の精神は、1980年代以降、世界的に実践されるようになった。②香港人建設専門家が多く育成され、1970年代後半までに成熟した。彼らのなかには少なからぬカトリック信徒がいた。③教区は返還に備え、多数の教会堂建設事業を自立的に実施しなければならなくなった。

次に、1950年代以降、教会堂建設における信徒参画は、4つの段階で展開したことを明らかにした。①1950年代-1970年代前半：信徒の参加は設計・施工の請け負いに限られ、奉仕としての参画は非常に少なかった。またいくつかの参画の試みは成果を出せずに終わった。他方、第二バチカン公会議が1960年代前半に開催された。教区は、公会議が示した、信徒使徒職を含む新たな教会論を実践する必要性を認識し始めた。②1970年代後半-1990年代前半：教区典礼委員会聖職者が主導し、建設専門家信徒を教会建築設計に参画させる試みが始まった。しかし、信徒はあくまで聖職者に従属する立場に置かれた。信徒の専門性が教会堂建設に必要なという認識が教区全体に徐々に浸透していった時期であった。他方、司教が、公会議の精神に沿った教区改革を主導した。このことも信徒参画を後押しした。③1995年-2005年：「教区建築及び発展委員会」が1995年に設立された。多数の建設専門家信徒が委員となり、教区の建設事業において主体的な役割を果たすようになった。彼らは教区の依頼を受け、事業計画、実施、監理においてその専門性を活用した。この時期、教区営繕における信徒の役割は確立されたものとなった。④2006年-2017年：信徒参画がパラダイムシフトをした。第3期までの信徒の奉仕は、実務的奉仕、聖職者の補佐に限られていた。1980年代以降の世界的な霊性運動、香港では特に2000年代以降に信徒霊性運動が興隆したことに影響され、建設専門家信徒たちは、営繕の目的を、彼ら自身の霊的成長に置くようになった。

営繕と霊性を統合した、新たな組織（カトリック建設専門アドバイス・グループ）が教区建築及び発展委員会の下部に 2006 年に設置された。信徒は聖職者に従属する奉仕や使徒職のあり方を脱し、主体的に信仰を生きる存在へと変わっていったのである。

(5)本研究から、教会堂営繕に奉仕することが信徒の信仰そのものであることが明らかになった。特に香港では 2000 年代以降、建設専門家信徒たちは奉仕において、自身の霊性、霊的成長を意識的に深めることこそが重要であることを自覚し実践するようになった。このことを、香港のカトリック教会の事例研究を通して明らかにした。このようにしてみると、信徒の営繕活動そのものの価値が浮かび上がってくる。そして文化財というまなざしで教会堂を見るならば、建築だけではなく、そこに信徒共同体があり、信徒が営繕をおこなっているという営みそのものを持続させていく、あるいは彼らなりの論理で更新させていくことが、いかに宗教建築の価値の総体性にとって必要なことであるかは明らかである。この営みは文化財の「オーセンティシティ（真実性）」や「インテグリティ（完全性）」を構成する重要な要素であることを、本研究は論証していると考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

- ① 福島綾子「信仰としての教会堂営繕：九州、香港のカトリック教会の事例から」日本カトリック神学会誌、第 28 号、2017、査読有、掲載決定済
- ② Ayako Fukushima and Yoshitake Doi, “The Catholic Building Professional Advisory Group and its Spirituality: laity involvement in church building system of the Catholic Diocese of Hong Kong”日本建築学会計画系論文集 NO. 708, pp. 429-439, 査読有, 2015

[学会発表] (計 1 件)

- ① 福島綾子, 土居 義岳, 近現代における「信徒」の位置づけの変遷と教会建築：近現代教会建築史に関する比較論的研究 (4), 日本建築学会全国大会 (広島大学 広島県東広島市), 2014.09.12.

[図書] (計 2 件)

- ① Ayako Fukushima, “Demolition of Tangible Properties as an Intangible Practice” *World Heritage, Tourism and Identity: Inscription and Co-production*,

Laurent Bourdeau 他 2 名編 Ashgate, 2015, 290p

- ② 福島綾子, 「教会建築の営繕をめぐって」『絆の環境設計 21 世紀のヒューマニズムをもとめて』(土居義岳編)、九州大学出版会, pp. 159-168, 2014, 216p

[その他]

Ayako Fukushima, *Laitry Involvement in Catholic Church Buildings of Hong Kong: Interpretation within Religious, Social and Political Contexts from the 1950s to 2015*, 九州大学 学位論文 博士 (工学), 2016

6. 研究組織

(1) 研究代表者

福島 綾子 (FUKUSHIMA, Ayako)
九州大学大学院芸術工学研究院・助教
研究者番号：5 0 4 3 2 8 7 8

(2) 研究協力者

土居 義岳 (DOI, Yoshitake)
九州大学大学院芸術工学研究院・教授